波・メール通信句会

第８０回　令和七年十二月

富山ゆたか

主宰特選三句

冬夕焼ペダルかの日へ漕ぎに漕ぐ　関　美晴

過ぎ去っていった日々。再びは戻れないことは解っているのであるが・・。一日の終わりの「冬夕焼」の季語が象徴的である。

さよならの尾灯の潤む小夜時雨　大平　政弘

別れ難い別れなのであろう。「小夜時雨」の季語にご自身の気持を籠めて詠われた。何とも物語性のある句。

ボール蹴る落葉蹴る子にある明日　鎌田紀三男

何か悲しいこと、口惜しかったことがあったのだろうか。ボールを蹴り落葉を蹴っている少年の姿が見えて来る。下五の措辞「ある明日」に共感しきりである。

主宰入選五句

人込みのマスクの奥にある暮し　大谷みどり

バレバレの嘘にうなづく冬ともし　鎌田紀三男

ぽつねんと片目のだるま十二月　稲吉　豊

越えられぬひとつ目深く冬帽子　君島　京子

大太鼓一打のうねり年を越す　関　美晴

作者一句（互選・得点順）

凍光の星座妖光の曜変　山田せつ子

セーターをぬぐ抜け殻は吾の化身　風野　でら

極彩色の寒灯揺るる中華街　田中　順子

年の瀬もハシビロコウに動きなし　霧野萬地郎

伊豆山の磴下る毎冬の海　亀倉美知子

太古よりをみなは強し帰り花　伊藤真理子

舌焦がす千本釈迦堂大根焚き　飯野　深草

友逝きぬ少し欠けたる冬の月　廣田　洋々

寒晴や大磯の富士矜持あり　帆川　透

さらさらと砂糖一匙大晦日　宮川　敏江

白鳥の首はどこぞや羽繕ひ　千乃　里子

ボール追う親子の影や冬夕焼　山崎　美紀

おとろへに万の喝采もがり笛　富山ゆたか

再会を心待ちして冬木の芽　岡坂ゆう子

火縄振り四条通りを歩みけり　坂本　弘道

美々しくも仮の化粧や床紅葉　粋　狂　子

黄蝶かと思えば枯れ葉浮き漂い　中出　隆義

荒荒し河口を出でて冬の海　菅谷　睦

暁天にときめく歩み冬銀河　山田　節子

会員選評より

人込みのマスクの奥にある暮し　大谷みどり

マスクをはずした顔にはそれぞれの生き方や暮らしが現れますね。比喩を使い想像力を掻き立てられるお句。（風野でら）

ぽつねんと片目のだるま十二月　稲吉　豊

だるまにもう片方の目が描かれるよう、即ち願い事が叶うようにと、だるまが置かれている。「ぽつねんと」の措辞が、なんともいえぬ味を出している。（千乃里子）

凍光の星座妖光の曜変　山田せつ子

天には凍てて輝くオリオン座やおおいぬ座。地には人智の妖しい光を放つ天目茶碗の星紋。破調ながら不思議な魅力をもった佳句。（伊藤真理子）

セーターをぬぐ抜け殻は吾の化身　風野　でら

脱いだセーターがまだ温もりを残したまま横たわっている様を見て、それを吾が化身と見立てたのは何ともおもしろい。（鎌田紀三男）

極彩色の寒灯揺るる中華街　田中　順子

中華街を久しぶりに歩いてみて、けばけばしくも感じる赤い灯が目に入った。忘年会には平常時と異なるこの景色が刺激的である。（富山ゆたか）

年の瀬もハシビロコウに動きなし　霧野萬地郎

ハシビロコウ、何時間でも獲物を捕らえるまで動かないらしい。待つことの苦手な人間にユーモアのパンチです。（関美晴）

伊豆山の磴下る毎冬の海　亀倉美知子

山を下り、次第に迫ってくる海。作者の動きと眺める景色に共感します。（霧野萬地郎）